

手・頭・心で遊べるのが組み木の良さ 組み木の輪を広げたい

子どもたちの期待 に応えるため

無言で電動糸のこに向かう小黒三郎さん。デザイン通り木を動かす手には迷いがありません。サインを求められると快く応じる姿にやさしい人柄を感じます。

小黒さんは全国で個展を開く組み木デザイナー。大学で油絵を学んだ元図工・美術の先生で、勤務した盲学校時代、子どもたちに木のおもちゃを作ったことがきっかけとのこと。「盲学校の子どもたちと出会ったことがきっかけで、この世界に入ってね、デザインは独学なんだよ。子どもたちの期待に応えるために作り続けたなあ」と小黒さんは話します。

子どもが興味を持ち、離すことなく遊び続けなければ良いものとはいえないというのが小黒さんの思い。「組み木は飾るだけでなく、組み合わせる、立たせてバランスを取るなど遊びながら考えるこ

とができるもの。手を動かさず、頭の中で想像する。中には物語を作ってしまう子どもたちもいるんだよ。5歳まで手と頭と心を使って、一生懸命遊んで欲しいなあ」と組み木に寄せる思いを熱く語る小黒さん。使う材料の厚さも切りやすく、立たせやすいよう考えられています。

組み木の輪を もっと広めたい

愛らしい組み木のデザインについて小黒さんは「だいたい朝に思いつく。夜はお酒を飲んでしまうので思いつかない」と笑います。毎朝30分は電動糸のこに向かい、技術を落とさないようするのが日課となつていそうです。

全国でたくさんの方が小黒さんに師事しています。しかし、小黒さんは「子どもたちが知っている木のおもちゃは積み木なんだよ。まだまだ、組み木の認知度は低いのが現実。作り手が増えれば広がっていくと期待しているんだ」

組み木デザイナー

おぐろ

さぶろう

小黒 三郎さん（岡山県倉敷市）

人の作家の思い

品を展示された作家の皆さんに、作品や活動、日野町への“思い”を聞きました。

と今後も精力的に活動し、輪が広がっていくことを望みます。

また、日野町で木のおもちゃづくりグループが活動していることについて「町の人たちが、木のおもちゃへの関心が高いことがうれしい。行政ではなく、住民主体での活動が盛んな地域は全国的にも珍しいよ。設備もそろっている。これからも楽しんでほしい」とエールをおくります。

この町で開きたい 次の展示会を約束

「木のお雛さま展」の会場は、町公舎で開かれました。

これは、小黒さんが町公舎の趣ある雰囲気が入り、町公舎での開催を熱望されたからだそうです。小黒さんも「昔のたたずまいを残す雰囲気が好きだなあ。お雛さまを展示する雰囲気はぴったり合うよ」と低い天井を見上げながらにっこり。

木のおもちゃの輪を広げ、今回はおもちゃ作家の若林さんに声をかけ実現した三人展ですが、次回、四人展への期待を聞くと「四人展の可能性は大いにある。町公舎の2階が使えるようになれば、展示の幅が広がるね」と目を輝かせながらうなずきました。

体験教室をきっかけに 皆さんが作ることを楽しめるように

子どもに
遊んでほしいから

どうやって動かすのだろうとおもちゃの前で悩む人に、やさしい口調で仕組みを説明し、感動を与える若林孝典さん。「できることをきつめ、ものにしていくのが私のスタイル」と若林さんは話します。おもちゃ作家の前職は児童心理学が専門で、子どもの心のケアに携わっていたそうです。

木のおもちゃを作り始めたきっかけは「たまたま木があり、自分の子どもにおもちゃを作ったことがきっかけ。面白かった。おもちゃを作る仕事があることも知らなかったんだ」と振り返ります。また、若林さんが作るおもちゃの魅力の一つ、動くおもちゃを作るきっかけを作ったのも子どもで「子どもにミシンが動く仕組みを聞かれ、その仕組みを木で作ったのが始まりでした。どう作るとう動くのか、どうしたら面白い

動きになるのか考えるようになったんです」と笑います。今回展示されたおもちゃも、取っ手を持ち、回して得られる動力を力に、玉送りや鳥が羽ばたくなど、見る者に驚きと感動を与える仕組みがいっぱいで、子どもも大人も遊びだしたらおもちゃから離れない様子でした。

ものづくりは
心を成長させる

若林さんに転機が訪れたのは、子どもが小学4年生になり、木のおもちゃはもういらなと言われた時だったそうです。「遊ぶのが嫌になったのではなく、作りたくなかったのです。木にかかわらず自分で作って遊んでいました。私も遊んでくれるおもちゃを作らなくてはと励まされました」と微笑みます。心の成長に必要なのはものづくりが一番だと確信し、若林さんは全国でおもちゃづくりの体験教室を開く活動に取り組んでいます。「年20回以

おもちゃ作家

わかばやし たかふみ
若林 孝典さん（岡山県美作市）

Interview

木のおもちゃづくりグループと親交が深く、今回の「木のお雛さま三人展」で、個性あふれる作

上出かけて、教室を開いています。西は九州、東は東京のあたりまで出かけたかな。ものを作ることを生活に取り入れてもらいたいですね。おもちゃにかかわらず料理でも良いんです。親子で難しいことに挑戦することで心が通い、家庭の問題も解決できると信じています」と話します。

日野町でも毎年、夏に体験教室を開いてくださり、多くの参加者でにぎわいます。

これから
力になりたい

若林さんが日野町を訪れるきっかけになったのは小黒さ

ん。「私がここで活動できるのも、小黒さんの活動が受け入れられているからだと思います。木のおもちゃづくりグループは、先生と呼んでくれるけど、よそよそしい感じがなく、気さくに触れ合っているだけでいいです。これからも力になりたい」と今後の活動に期待しています。

また、今回の展示会について「お雛さまなんて作ったことがなかったんだよなあ。いつも新しいことにチャレンジさせてくれるグループです。今回も大きな刺激を受けました」と若林さんも楽しめました。